

蒲田千年樟

写真は自宅近くの蒲田神社の「蒲田千年樟」と記された大木。なかなか貫禄がある。潤いに欠ける東三国界わいで、貴重な緑の空間だ。境内に「御社名と地名 大樹の杜」という掲示が。写真に撮ったので、書き写しておきたい。

足利時代(南北朝)入り、この地を仏正院の村と言い、このお社は字・室にあり「室の社」と、また「稲荷社」とも呼ばれていた…。明治四十二年より大字・蒲田の字から「蒲田神社」と号す



現在も立派に茂る千年楠(樟)の大樹・樹齢千年と伝える一株と同じ切株、他に数百年の樹々が存在し、明治大正時代の頃までは、樟・杉・松などの大木が繁茂して、空を覆い昼なお暗い境内であったと言い伝わっています。

遠い遠い昔、千数百年前の時代に、強風をさえぎる大木のあるお社で、船の風待ちをされた事により、それ以前の開拓者としてこの地に営みを始めた先住の人達は、この杜に神のご加護と祈りを通して、里造りを重ねつつ、年年再々お祭りをし里人たちと共に代々につたえました。



近所にお米屋さんがある。ここのお米さんは、いろんな銘柄の玄米が並べてあり、そのつど精米してくれる。スーパーなどで買う袋に入った精米済みのお米とは、かなり味が違う。こちらの方が断然おいしい。お米らしさを味わえる。食べ過ぎに注意しなくてはならない。

つい話がそれたが、ここのお米さんは百年の歴史があるという。「百年前はどうかした?」と聞いてしまった。申しわけないが、分からないという返事。ご主人が幼い頃、店は蒲田神社横にあったという。土地区画整理事業により、現在のところに移ってきた。東三国では、長い歴史をもつお米屋さんだ。

昔は蒲田神社と大願寺、それに常光寺あたりにだけ、民家が並んでいた。あとは一面の田んぼや畑、蓮池などだったという。ここは蓮の産地だった。1月18日にレポートした、『新大阪の建設』に掲載されていた蓮池の写真を思い出した。



(2018年4月16日)